

卒業記念写真

本学に現存する最も古い卒業記念写真は、一八八九（明治二十二）年の英吉利法律学校第四回卒業記念写真である。これは、一九五二（昭和二十七）年当時の学員課が卒業生の一人である桑原羊次郎から借用して複写した写真である。

写真に付された「英吉利法律学校講師及己丑三年生写真姓名」によれば、写真撮影の企画を担当したのは岩田鍊、渡辺勘十郎、杉山平治郎、深谷喜久太郎の四人の学生で、六月二十三日に撮影が行われたことがわかる。

場所は、当時の学校としては宏壮な建物であったルネサンス式の赤煉瓦二階建て新校舎の中庭であった。写真師は、水雷爆発時の水煙の瞬間撮影に成功したことから「早撮り写真師」として名を馳せた浅草の江崎礼二である。

写真には、当日参集した講師一三人と学生一〇五人の合わせて一一八人が勢ぞろいしている。二列目に校長の



1889年6月撮影の卒業記念写真

最前列では、敷物の上できちんと正座するものがあるかと思えば、足を投げ出したりあぐらをかいている者もあり、またかんかん帽を前に立て膝に頬杖をつく姿も見受けられる。彼らの思い思いの恰好からは、当時の

学生の風俗の一端が垣間見えてたいへん興味深い。制服・制帽や徽章が定まっていなかった本学草創期ならではの写真といえよう。

ところ

で、第四回卒業生は英語・邦語の両法学科を合わせて一四三人であったから、写真に写っている学生は、約七割であったといえる。しかし、写真撮影に参加したこの一〇五人のうち四人については、八九年の卒業生記録で確認することができない。実は、四人中二人は翌年の卒業であることがわかったが、残りの二人については不明である。

ともあれ、この写真撮影から三ヶ月経った九月二十八日に卒業式が挙行され、その直後の十月英吉利法律学校は、東京文學院・東京医学院と連合して私立総合大学を設立する目的で校名を東京法学院と改称している。

したがって、第四回卒業生は英吉利法律学校最後の卒業生となったわけであり、卒業記念写真に添付された「今ヤ一朝学校ヲ辞スルニ当リテ東西相離散シ南北相分処シテ再ヒ之カ交誼感情ヲ聚ル能ハサラントス」という言葉は、三年間にわたる英吉利法律学校での研鑽と友情を信じて社会に巣立つ学生の決意を今に伝えているように思われる。

増島六一郎をはじめ岡村輝彦、岡山兼吉、渋谷慥爾といった創立者で幹事や講師となった人物のほか、松野貞一郎や伊藤佛治さらに高橋捨六、中橋徳五郎、岡野敬次郎など学校経営に尽力した講師たちの顔が見える。

また学生では、後年、上海やホノルルの総領事を歴任し外交官として活躍した永滝久吉、本学初の海外留学生に選ばれて一八九九年ドイツ留学を果たし、帰国後弁護士業のかたわら講師を務めた渡辺豊治、文官高等試験に合格し会計検査院検査官となった岩波一郎らの姿もある。

学生たちの服装は、和服が約四分の三で、残りの四分の一ほどが洋服である。卒業記念ということもあって羽織を着用している者が多く、洋装の中には三つ揃いもわずかながら確認できる。大半の学生は、まっすぐにカメラの方を向いて神妙な顔つきをしているが、中には斜に構えてポーズを作っているものもある。